



從容録に学ぶ (五九)

第四五則 覚經四節

〔示衆〕

衆に示して云く、現成公案は、只だ現今の抛りのみ。本分の家風は、分外などを図らず。若也、強ちに節目を生じ、枉らに工夫を費さば、尽是、混沌の与に眉を画き、鉢盂に柄を安くるなり。如何んが平穩を得るや？

〔本則〕

挙ぐ、『円覚經』に云く、「一切時に居つて妄心を起さざれ。」(不)「諸の妄心においても亦た息滅さざれ。」(不)「妄想の境に住りても了知を加えざれ。」(不)「了知なきにおいても眞實を弁えざれ。」(不)

〔頌〕

頌に云く、巍巍堂堂、磊磊落落。鬧處には頭を刺み、穩處には脚を下す。脚下線斷きて我れ自由、

鼻端の泥尽きて君、斷ることを休めよ。動著すること莫れ、千年の故紙中の合葉に。

今回は変わった一則ですね。お祖師さまの言動による公案ではなく、お經の文言がテーマとなっているからです。じつは『從容録』の中にはこのような則が四つほどあるのですが、今則是その一つというわけです。お經の名は円覚經。この經典は一巻だけの比較的短かいもので、内容は仏の完全円満なお覺りの世界を實証し具現するための実践を説いたお經、といわれています。

唐代に禪宗が成立する時期には思想的にかなりの影響を与えた經典の一つです。特に禪宗の一派である荷沢宗に属した宗密(八四一寂)という有名な学匠は、生涯をこの經典の研究や解説に捧げて多くの著述作品を著し、教禪一致の宗風を掲げています。以後、宋代にいたるまで、この經は天台や華嚴の教学仏教と並んで禪門でも広く読まれています。わが道元禪師は円覚經をすぐれた説とはみていません。



それはともかく、『本則』を学ぶに当つて、まず例によつて万松さんが全体の要旨を示した〔示衆〕を意識してみましよう。

「大自然に遍満しているすべての存在は、みな真理そのものの顕われであり、それはいま目前にあるがままのすがただ。同じようにに仏さんとしての真人の家風は、ことさらに何も求めなどしない。もし、迷悟や是非などの分別や工夫をするなら、それはちょうど純真円満なものに対して、いたずらに技巧をこらすようなものよ。さあ、どうすれば真実の安心が得られるかな？」

抽象的な言葉が多いので、むつかしそうですね。それもそのはず、この第四五則は『從容錄』の中でも特にむつかしい一則とされています。でも、所詮同じ人間がのこした言葉です。何をいわんとしているのかを的確につかめばよいので、枝葉にふりまわされないので。そんな気力で向かえば、たいていのものはわかってくるのです。

この「本則」の語句は、円覚経の「清淨慧菩薩章」の中の一節です。たいへん短いので、宏智禅師がその風光を詠じた「頌」も採録しておきました。では「本則」の意訳です。

「円覚経に説かれておるぞ。いつでも迷いを起こしてはならない。だがどんな迷いもなくそうしてはならない。迷って対象にとらわれてもそれを分別してはなら

ない。分別すべきものなどないのだから、真実を弁ずる必要などない」と。

こんなところでしようか。妄想をどう対処するか、その教えですね。すると、私たちに切実な問題です。だいたい、タイトルの「覚



宗密が住した西安市郊外の終南山草堂寺大雄宝殿

経四節」とは、円覚経で説かれている四つの節目（＝眼目）という意味。つまり、この則は①妄想を起すな、②起こったら消すまいぞ、③妄想の対象に分別をするな、④分別しない心が真実心だとも思うな、の四つです。

①と③は常識で分かります。問題は②と④。よいと思えるのに、なぜダメなのか。キーポイントは、妄想を起こす心もお覺りの真実心もつまりは同じ一心のはたらきだということ。煩惱即菩提。渋柿もそのまま甘しつるし柿、の世界ですね。だから、②の妄想を消すはたらきも安心、④の分別しない心も措定したらダメ、というわけ。ただ、これはあくまで教説の理論で、それを現実生活の上に体現させるのが禅！だからこそ、万松さんはこの四節にみな「不_レしからず」とコメント。どれにもとらわれてはダメ、ということです。ちなみに宏智さんの「頌」は難解なので、意識は割愛します。

桜が咲けば美しいのは常識。ですが、降雪寒冷の翌朝、当山雲堂の前に一輪開いた河津桜のすばらしさを、私はこの二月一〇日に体験。それは、全身うち震えるような感激で、まさに春来るの体感でした。理屈ヌキで妄想分別の糸が切れた絶対心のはたらきでした。見るもの聞くものにこんな体感があれば、円覚経の説く世界の具現が、こんな卑近なところにもあるのですね。坐禅は、けっして雲堂の中でだけ良い気分にはたると、生活隔絶の行などでは断じてありません。

四五周年行事を顧みて

利他の四五周年記念行事

龍泉院住職 椎名宏雄

参禅会員の不断の精進により円成した記念行事は、まさに「自未得度先度他」の実践でした。

これは『正法眼蔵』発菩提心の巻が示す核心的な言葉です。

憶えば、昨秋の連続イベント、三陸慰霊・寺宝展・講演会の三つは、まさしく利他行の発露であり、五月の得度式はそれを予想して行修した三宝への帰敬と、生き方への強烈な自己反省ではなかったでしょうか。

人はみな、大自然のいのちと無数の他者たちからの恩恵によって生かされています。ゆえに、自然を崇め、大切にせねばなりません。他人に対しても同じです。

こうした共同体における自他の生への洞察こそは、カネとモノへの執着がますます強固な現今、何と重いことでしょうか。

四つの利他行を説く「菩提薩埵四摂法」の巻は、九五巻本では奇しくも第四五巻なので

あります。

有難く厚くお礼申し上げます

代表幹事 小畑節朗

堂頭老師が昭和四六年に参禅会を始めてから四五十年。毎月の定例参禅だけでも五四〇回、当初は毎回数人の参禅者、誰も来ない時は老師が一人で坐られた。只一回も休みなく四五十年間継続できたのは老師のご法愛と佛天のご加護に加えて会員和合の賜物であります。

定例参禅以外の年間行事の最初は成道会で三四回を数え、現今は涅槃会・降誕会・一夜接心・歳末助け合い鉢鉢、また施食会のお手伝いと年分行事は行事として親しく馴染んで来ており、また月三回の作務は定着し、昨年より始めた自由参禅にも新しい参禅者が見えられるようになりました。

四五周年記念行事は一昨年暮れに古参の方々と相談致し、年前半に在家得度式・後半に大震災被災地慰霊東北旅行・寺宝展・講演会と共に後世に残る記念出版を企画致し、記念出版を除く諸行事は盛大かつ感銘深く円成いたしました。

誠に有難く、堂頭老師のご慈慮と会員皆様のご協力ご支援に深く感謝申し上げます。

行事の詳細は各行事にお世話頂いたまとめ役の方々の一文通りでございますが、約一年に涉るご尽力は大変なものでした。良く此処までやって下さったかと言うほどでした。

また普段の参禅会に来られない方で、自身の仕事、また健康問題や家族の介護の時間を割いて寺宝展にお手伝い頂きました。ここに改めてお礼申し上げます。

これは今迄の積み重ねで為し得た実績であります。さて次の五年後一〇年後は如何に為すべきでありますでしょうか？

現在マインドフルネスとか瞑想がブームを呈して居りますが、その源流と云うべきお釈迦様以来の「正伝の坐禅」を、魯の如く愚の如く行じる坐禅を続けることが第一だと思えます。

よって毎月の定例参禅・自由参禅には何方がお出でになっても確り坐れるように及ばずながら坐禅堂内外の環境整備に努める所存でございます。

皆さま、もう一度原点に遡り坐ろうではありませんか。

合掌

正法寺参観と東日本大震災被災 地慰霊の旅

東北の旅・無事円成

旅行委員 松井 隆

龍泉院では、東北には「正法寺」という名利があると、作務のお茶タイムに椎名老師と小畑代表のお話でお聞きしていた。その「正法寺」を訪れるチャンスが「龍泉院参禅会四五周年記念行事」で実現の運びとなった。

記念事業実行委員会に、旅行小委員会が設けられ、平成二十七年一二月に相澤、坂牧、五十嵐、松井の四名で旅行検討がスタートした。

検討の中では、次の二点をコンセプトとして、実行委員会に提案し、承認された。

一点は、東北・陸奥の「正法寺」上山。

二点は、東北大震災から五年が過ぎ、未曾有の被災者、尊いお命を亡くされた方、また、今なお方不明の方々に對する慰霊を合わせた「東北の旅」。

このコンセプトを基本に、六月七日・八日の両日、小畑代表幹事、五十嵐、刑部、松井の四名で、訪問候補地を見て回った。

この下見では、「正法寺」に合わせて、一

関にある「観林寺」及び陸前高田市にある「普門寺」を訪問箇所に選定した。

「正法寺」から三〇分ほどのところの「観林寺」訪問は、現住職の高橋哲秋老師が、震災の犠牲者供養に取組まれ、その中でも「祈りの道」の企画・実施の責任者として、地震被害者に対する宗門活動を熱心に進めてこられたこと、過去に椎名老師と一緒に仕事をされたとのことのお話を伺ったことによる。

陸前高田市にある「普門寺」は、犠牲者の鎮魂を慰霊する親子地藏や見守り地藏、参道に羅漢像が数多く鎮座していること、下見の時、大黒様から市内の津波の恐ろしい状況や間一髪、奥様の命が助かったこと、本堂に次々と運び込まれた遺体収容の様子などを伺ったことから、高橋老師と熊谷老師・両住職から当時のお話を伺うことが、慰霊の旅に相応しいと考え、訪問することにした。

下見の結果を、日本旅行に相談し、岩手国体開催、訪問先寺院の行事、椎名老師のご都合等を調整し、旅行実施日は一〇月一八日（火）～二〇日（木）の二泊三日と定めた。

訪問箇所は、一日目は、正法寺・観林寺・南三陸町（宿泊）、二日目は、陸前高田市の普門寺・碓石海岸・大槌町旧庁舎・花巻市

（宿泊）、そして三日目は、宮沢賢治の里・中尊寺・毛越寺を挙げ、スケジュールが決まった。

八月の参禅会で、参加者を募り、最終的に一六名、内女性が五名の参加となった。以下、旅行ガイドに沿って記録を記す。

◆一〇月一八日（火）

上野駅七時四五分集合

・八時二分、東北新幹線はやぶさ一〇一号で



一同、「正法寺」総門前で

出発(参加者一六名中三名は大宮駅から乗車)

・一〇時八分、一関駅に到着。

・一〇時三〇、岩手東武観光バスに乗車、最初の訪問地、「正法寺」に向かい「東北の旅」のスタートとなる。

・一時一〇分、「正法寺」門前に到着。時間の関係で、門前の月江庵で昼食をとる。

・二時三〇分、主たる訪問地、「大梅拈華山・円通正法寺」に上山。

正法寺

「正法寺」は、東北地方の曹洞宗第三の本寺に相應しい風格を備えた陸奥の古刹であった。総門、本堂と庫裡は、国指定の重要文化財で、本堂の広さは、間口二二間半、奥行き一二間半と、茅葺屋根では日本一の大きさで、二七〇坪。

庫裏も一六〇坪あり、本堂に次ぐ大きな建築であり、両方とも屋根は、茅葺である。その荘厳さは筆舌尽くし難く、椎名老師と小畑代表からお聞きしたとおりの名刹であった。

本堂参拝の後、盛田老師のお話を三〇分お聞きし、隣接する坐禅堂で一炷の坐禅を組んだ。

その後、知客役の佐々木さんから、正法寺

の由来、伽藍、建屋構造などについて丁寧な説明をして戴いた。そして、総門をバックに記念撮影し、一四時一〇分正法寺を後にした。

観林寺

・一四時三〇分、「観林寺」に到着。

高橋老師から、東日本大震災発生後の東北寺院の支援活動について、資料「東日本大震災に関する復興支援活動記録」に基づき、平成二三年三月一日午後二時四六分、マグニチュード九・〇の地震発生から、平成二八年



「観林寺」の高橋老師と

五月に慰霊として「祈りの道」での三千キロメートルもの長い復興の行脚を行ったことなど、きめ細やかな取組みを説明して戴いた。

玄関入ったところに真黒い地蔵が鎮座していたが、高橋老師のご説明では、三五〇年前に本堂の建築と合わせ、当時の妙智尼が祀った地蔵を奉納したようだ。本堂前で記念撮影をし、一五時五〇分お寺を後にした。

・一七時五〇分、南三陸ホテル観洋に到着。

途中三陸海岸に抜けた辺りで国道四五号線の交通渋滞に巻き込まれ、予定より遅れて到着。海岸温泉にゆつたりと浸かり疲れを癒した。宴会では、海の幸を肴に杯をほし、今日の旅を語らいながら夕食を頂いた。

◆一〇月一九日(水)

・七時三〇分、バスに乗車し、一時間の語り部による東日本大震災の被害状況を聞いた。特に、南三陸町の三階建て防災対策庁舎は、周辺の町づくりの盛土の間に取残されており、今後、時間をかけて残すか検討するとのことであった。

津波が迫りくる中であって、避難を大声で呼びかけていた「未希ちゃん」も、ついには津波に流された。また、多くの家族が津波で失い、失意に落ち込む様子など、熱のこもつ

た話に、聞く一同もつい目頭を押さえつつ、当時の大変な状況を思い浮かべ、言葉にならなかった。この庁舎の鉄骨骨組みの見える場所に、可愛いお像が安置され、花が一杯活けられ、一同、慰霊に手を合わせご冥福を祈った。

普門寺

・一〇時三〇分、予定通り「海岸山・普門寺」に到着。

お寺は、曹洞宗の古刹で、本尊は聖観音菩薩像である。庭の奥には三重塔があり、この塔には、気仙沼大工の独特な技法が見られ、岩手県指定文化財である。

バスを降り、参道を歩くと両側に様々な表情をした羅漢像が目につく。大震災から毎年八月の夏休みに、大学生が慰霊のため寺に来て、作成した石像であるとの説明であった。

正面に本堂、その前庭には百日紅の大きな枝ぶり良く花を咲かせていた。本堂に上がり参拝し、熊谷老師のお話を拝聴した。大津波の様子、亡くなった方の遺体をすべて受け入れたこと、羅漢像や見守り地像の話をお聞きした。

地震の時には、奥様が間一髪命拾いをした

こと、お寺が高台で眺めがよく、広田湾から市内に向かって迫ってくる大津波の様子が見えたなど、話が盛り上がり、予定の三〇分では終らなかった。



普門寺熊谷老師のお話

慰霊碑で法要

予定では、普門寺の後、奇跡の一本松での慰霊であったが、バスを降りて造成工事の中

を徒歩で往復四〇分もかかることから、中止して、昼食をとることになった。

・一二時一〇分、国道四五号沿いの食堂カフェ仙華園で頂く。バスの運転手さんからの情報によれば、大槌町旧庁舎前にある慰霊碑は最近塀で囲まれ中に入れなくなったとのこと。大槌町の役場に問い合わせると、確かに慰霊碑の所には入れなくなったことが確認できたので、実行委員の協議により、大槌町旧役場に行くことは中止した。代わりに陸前高田市の旧道の駅（タピッタ四五）の前にある慰霊碑で法要を行うことにした。

・一四時三〇分、大船渡市砦石海岸に着き、三陸海岸のリ阿斯式代表的地形を見物した。大変天候に恵まれ、青く透き通った太平洋の波が岩に白く裂ける景色は何とも素晴らしい。津波の時は、この景色が一変、様相を変え襲い掛かってきたのだろう。砦石海岸を後にし、陸前高田市から、国道三四〇号・一〇七号を経て、高速釜石自動車道を走り、宿泊の湯の杜ホテル志戸平には一六時五〇分に着いた。

御老師のご提唱

・一八時、椎名老師によるご提唱の開始。宴

会の部屋は広く、机を並べての拝聴であった。

提唱の主題は「正法寺第二代月泉良印禪師の伝記」(延宝伝燈録、巻第七)であり、曹洞宗の法系譜を付していただき、昨日訪れたばかりのフレッシュな内容で「正法寺」の開山期の様子が分かり易く、感銘深く拝聴した。

- ・一九時一〇分、小畑代表幹事の開会の辞、椎名老師のご挨拶を頂戴し、宴会開始。
- 小山さんの詩吟に花が咲き、明日の無事を祈って、またまた祝杯酌み交わした。

◆一〇月二〇日(木)

宮沢賢治記念館

- ・八時三〇分、ホテルを出発、バスの中では、賢治の詩「雨ニモマケズ」を一同声高らかに朗読し、賢治の思いに触れつつ、賢治の里に向かった。

- ・九時、「宮沢賢治記念館」到着。賢治の世界観、生き抜く詩の表現、生活実践など、科学、芸術、宇宙、宗教、農業の各ジャンルに分けた展示を見て、久しく人間賢治に出会えた。

中尊寺と毛越寺

- ・一一時、「世界遺産・平泉中尊寺」到着。金色堂を拝観し、その周辺など散策した。

- ・一二時三〇分、「世界遺産・毛越寺」到着。大泉が池一周・浄土庭園を散策し、背景の塔山を含めた周囲の自然と、仏堂配置の荘厳さとの清らかな仏の世界を作り出している景観に、暫し時を忘れる思いに浸かった。

- ・一三時四五分、食事処・世嬉の一に着き、遅い昼食をとった。地元料理のもち膳は、四色のもちと美味しい地酒「世嬉の一」を味わい、安全に旅を終え、一同祝杯を挙げた。

- ・一五時、一関駅着、一五時四八分、東北新幹線・やまびこ五二号に乗車、帰路に着く。大宮駅で美川夫妻と小畑さんの長男小畑信雄さん三名が下車。

- ・一八時一八分、上野駅に到着、無事を確認し、解散となった。

「東北の旅」では、「正法寺」「観林寺」「普門寺」の三カ寺の各ご住職から、貴重なお話をいただき、お世話になりました。お話については、龍泉院ウェブサイトを <http://www.ryusenin.org/> に掲載しております。

また、椎名老師をはじめ、小畑代表幹事、旅行参加者の皆様、委員の皆様には厚く御礼申し上げます。東北大震災被災地での慰霊を含め、無事円成しました。この旅を、今後の仏道修行に生かしたいものです。(完)

寺宝展、予想以上の大盛況

参観者から感嘆の声も

寺宝展委員 岡本 匡房

一〇月三〇日(日)から十一月六日(日)までの八日間、参禅会四五周年記念行事の第二弾として、寺宝展が龍泉院の本堂と大悲殿で開催されました。

展示したのは合計一〇三点。絵画、仏像、典籍など単に仏教に関連したモノだけではなく、地域の歴史に関連したものも多く展示されました。江戸時代から戦後までの寺宝が多くありましたが、さび付いた古刀、唐から宋にかけての古銭などと古代の歴史を感じさせるモノ、農地改革に関連した本などもありました。「小さな博物館より充実している」との声も聞こえ、みな、その水準の高さに感嘆していました。

足の便が悪く、当初、参観者がどれほど集まるか懸念されました。ところが、尻上がりで増え、合計七〇〇人ほどと予想を大幅に上回る方が上山され、大盛況になりました。

朝日新聞、サンケイ新聞、東京新聞などマスコミだけでなく仏教紙最大手中外日報、柏

市民新聞、柏市広報誌なども取り上げ、更に五〇〇枚以上のチラシを会員各位が配っていただいたことが奏功したと思います。

参観者は柏、我孫子だけではなく、松戸、白井、流山など東葛地方の方が見られました。中には「自分の寺で行う時の参考にしたい」と、はるばる長野県からこられた僧侶や松戸の博物館の学芸員などもおられました。寺宝展では下記七人の方が委員になりました。

武田〓展示指導・実施

山本〓チラシ、説明文の製作

坂牧・牧野〓展示方法の工夫と各種文書の製作

河本・小林〓展示品の結界など各種小道具の製作

岡本〓広報・宣伝

役割を分担、素晴らしいチームワークを発揮したことが成功の一因になったのではないのでしょうか。

いや、委員だけではなく。展示の準備、撤去、更に寺宝展中の受付、説明に多くの参禅会の会員の方々が積極的に参加されました。展示会場では委員の方だけでなく、参禅会の方々も説明に当たりました。説明に要

を得ていることもあり、多くの参観者が満足していました。「参禅会の総力が結集された」といっても過言ではないと思います。

費用も八万円台と予算の一五万円を大幅に下回りました。これは当初、購入を予定していた板類など多くの展示用品を手作りにしたことによるものです。

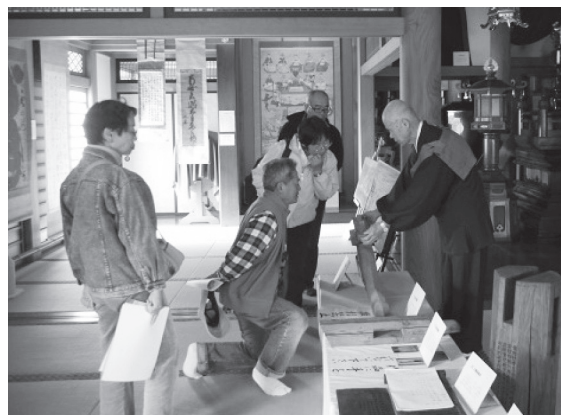
一月二七日、例会の日に柏駅の近くで打ち上げを行い、七人が参加、楽しい時を過ごしました。



グループで見学の方々に解説される御老師



盛況の会場



自ら手に取り説明される御老師

【仏 像】

14 点

	名 称	時代	作 者	備 考
1	釈迦如来像	室町期		旧本尊
2	阿弥陀如来像	文政2(1819)修復		旧観音堂本尊.修復時の胎内文書あり
3	如意輪観音像	近世力		現観音堂本尊.伝 開基相馬氏守本尊
4	子安観音像	文久3(1863)	杉山宗哲(利根町仏師)	
5	子安地藏像	文政2(1819)修復		旧観音堂に奉祀.元子安講本尊
6	愛敬稲荷像	寛政2(1790)		稲荷堂奉祀
7	妙見菩薩像	寛政2(1790)		稲荷堂合祀
8	多宝如来像	享保19(1734)		庫裡本尊
9	竜神	?		伝 開山奉祀の守護神で秘仏
10	達磨大師像	寛政年間修復		本堂に奉祀
11	開山禪師像	寛政年間修復		本堂に奉祀
12	大権菩薩像	寛政年間修復		本堂に奉祀
13	道元禪師像	寛政年間修復		本堂に奉祀
14	大日如来像	近世		元光明真言講の本尊

【絵 馬】

4 点

	名 称	時代	作 者	備 考
15	准四国八十八箇所道案内図	明治5(1872)	伝 山崎弁栄	額入
16	善光寺参拝図	明治27(1894)	石井静馬(泉出身 仏師)	板書額入
17	善光寺・日光参拝図	大正6(1917)	中台浅次郎	板書額入
18	筑波山参拝図	大正12(1923)		板書額入

【絵 画】

14 点

	名 称	時代	作 者	備 考
19	制多迦・矜羯羅図	南北朝	龍湫妙沢力	対幅.泉村吉祥院旧蔵
20	洞山過水悟道図	正徳2(1712)		木版彩色.元代の絵に賛.本多氏の寄進力
21	仏涅槃図	正徳5(1715)	田原町市郎兵衛	本多氏の寄進力
22	十二天図	安永7(1779)	染谷元右衛門光嘉	十天のみ
23	出山釈迦図	天保11(1840)以前	谷 文晁	
24	高祖大師行跡図	嘉永5(1852)		対幅.木版彩色.本多氏代官倉品氏寄進.付文書
25	十王図(地獄図)	幕末		
26	百観音図	幕末	雪洞林藤原昌信	
27	如意輪観音図	幕末		元午斎講本尊
28	子安観音図	幕末	一緑斎月静	元子安講本尊
29	開山頂相	慶応4(1867)	一緑斎月静	十三仏、道元頂相と三幅対
30	三国伝燈祖師図	明治1(1868)以前		
31	子安観音図	明治末頃	山崎弁栄	
32	文殊菩薩図	明治末頃	山崎弁栄	

【墨 蹟】

8 点

	作 者	生 没	内 容	備 考
33	鈴木 正三	1579~1655	天神名号	三河恩真寺開山.元 徳川家康家臣
34	月舟 宗胡	1618~1696	「永平広録」小参語	金沢大乘寺26世
35	大愚 良寛	1758~1831	和歌2首	
36	如蓮 大演	1785~1858	火伏せの竜	土浦神龍寺20世
37	隠山 顕之	?~1868	「待道大権現」	龍泉院26世
38	大町 桂月	1869~1925	7言2行	詩人、評論家.長女愛さんは鷲谷野染谷家へ
39	渡辺 玄宗	1869~1963	7言2行	總持寺独住17世
40	澤木 興道	1880~1965	7絶2行、高祖偈頌	總持寺後堂.通称「宿なし興道」

【工芸品】

10 点

	名 称	時代	作 者	備 考
41	古代刀	6世紀		直刀.出土品
42	古銭	唐～北宋		数百枚.手賀沼畔の古武士墓より出土
43	仏餉器	～1726		真鍮製5個.14世代新添
44	鰐口	享保17(1732)		銅製.泉村秋元四郎兵衛寄進
45	華瓶	近世		浅井宇右衛門貞頼が天休院殿の為に供養.銅製
46	鉦鼓	近世	西村和泉守	銅製
47	柄鏡	近世		白銅.2枚
48	土偶五人囃子	近世		素焼.境内の古川氏墓地より出土
49	殿鐘	天保10(1839)		鉄製.25世正鉄鉄眼代に新添
50	分福茶釜(付文書)	明治期		鉄製.泉出身の岩崎屋山口平三郎の愛用品

【木製品】

23 点

	名 称	時代	作 者	備 考
51	梢付塔婆	中世		泉の表谷津 田甫より出土.文字あり
52	開基牌	天正9(1581)		相馬氏の位牌
53	開山牌	近世初		開山量指長英の位牌
54	龍神厨子	近世初頃		龍泉院守護神
55	三掃戒板木	宝永7(1710)		12世大忍玄道代
56	旧本堂建材	享保19(1734)		多数
57	血脈板木	延享2(1746)		15世湛龍代
58	伊勢・讃岐年参版木	近世		講元、泉 染谷久左衛門
59	旧本堂欄間	宝暦2(1752)	常陸阿波村左衛門春信	泉 秋元四郎兵衛寄進.3枚
60	妙見勸請札	寛政2(1790)	19世天外泰仙(筆)	
61	旧山門棟束	寛政8(1796)	19世天外泰仙(筆)	山門材は他に多数
62	旧山門彫刻	寛政8(1796)	伊藤伊右衛門正義	棟梁
63	稲荷名号札	寛政8(1796)頃	19世天外泰仙(筆)	
64	檀中位牌群	文化3(1806)		56基、20世当観宗英代
65	前机	文化8(1811)	泉 庄右衛門大工	
66	百観音勸請札	天保10(1839)	25世正鉄鉄眼(筆)	
67	百観音板木	天保10(1839)		25世鉄眼代
68	天満宮棟札	天保15(1844)	26世隠山顕之(筆)	
69	本多家位牌	近世末	26世隠山顕之(筆)	
70	穀庫棟札	安政2(1855)	26世隠山顕之(筆)	
71	垢瘡除け板木	明治期カ		「湯尾峠茶屋孫嫡子さるや☆」のお守り
72	寺号額	明治10(1877)	石井静馬(作)、 徳昌寺雲涯仙龍(筆)	
73	山号額	明治20(1887)	石井静馬(作)、 徳昌寺雲涯仙龍(筆)	

【典 籍】

9 点

	典 籍 名	年代/形状	備 考
74	神仙秘密龍明大医法	天明7(1787)写/1冊	永禄9(1566)、右衛門督平胤康筆写本の写し
75	両界念誦私記	明暦3(1657)写/2冊	真言宗豊山派総本山長国寺12世尊如の手書本.吉祥院旧蔵
76	禪機図解	元禄2(1689)刊/1冊	武州長岡堂刊
77	一休禪師裸草紙	近世写/1冊	広瀬水上旧蔵
78	佐倉騒動記	近世写/2冊	
79	金陵文抄	明治14(1888)刊/2冊	松ヶ崎、吉野金陵著、東京宇田総兵衛刊
80	東葛飾郡案内記	大正3(1914)刊/1冊	神田海之助著、船橋川奈部書店刊
81	長命家庭孝子伝	大正5(1916)刊/1冊	権名豊洲著、東京仏教館刊
82	泉の光	昭和23～26刊/合冊	泉の民主倶楽部会報、1号～5号

【文 書】

15 点

	書 名	年代／形状	備 考
83	新抄	文明16(1484)／12通	密教の切紙, 泉 吉祥院の旧蔵
84	属星供行次第	慶長5(1600)／1冊	密教の切紙, 泉 吉祥院の旧蔵
85	権現公拾五箇条之定	慶長18(1613)／1冊	キリシタン禁制の定め, 領主本多家からの通達か
86	当山建立奉加記録	宝暦2(1752)／1冊	旧本堂の建立記録
87	御鷹場村石高控帳	享保20(1735)／1冊	中の牧関係村々の石高
88	啓子勸化帳	寛政1(1789)／1冊	19世泰仙代
89	総門建立奉加帳	寛政6(1794)／1冊	旧山門の奉加帳
90	永平寺玄透請状	寛政11(1799)／1通	永平寺玄透→亮道, 瑞世の請状
91	光格天皇綸旨	寛政11(1799)／1通	光格天皇→亮道, 瑞世の証明書
92	阿弥陀如来像胎内記	文政2(1819)／1通	仏師杉山林哲記
93	一夜授戒・百観音入仏	天保10(1839)／1冊	25世鉄眼記
94	稲荷奉遷副翰	慶応2(1866)	神折伯王家→龍泉院
95	権四国八十八ヶ所御詠歌集	慶応3(1867)／1冊	
96	当院常住宝簿	明治6(1873)／1冊	27世浄心記
97	大師奉迎証	大正11(1922)／1通	鎌ヶ谷村軽井沢→龍泉院

【石造物】

6 点

	名 称	時代	作 者	備 考
98	板碑類	中世		出土品, 数点
99	しばり地藏像	中世		境外地藏堂に奉祀
100	百観音像	天保10(1839)	椎橋利助(石工)	100体, 他に15体, 観音堂に奉祀
101	熊野権現像	文化7(1810)		松戸代官浅岡彦四郎への供養塔, 同上
102	待道権現塔	弘化5(1848)		元境内に奉祀
103	たにし不動像	明治12(1877)		境外地不動堂本尊

合計

103 点

初めて拝観するものに感嘆

松戸市立博物館学芸員

中山 文人

驚きました。手賀沼近くの塚から掘り出された中国の銅銭、辛うじて年号が読める板碑の断片、天保の飢饉の頃に松戸町の石工が彫った百観音像……。興味の在処がマニアックに偏るのは博物館人の性（さが）とご容赦願います（いや、初めて拝見するものばかりで、感嘆しきりです）。

椎名宏雄老師にはこれ

までも、多くのお智慧を拝借してきました。しかし、それはどれも、御自身の経験と学識から紡ぎ出されたご見識です。今回、多様な宗教・歴史資料が集まる・集める・創り出す由緒ある寺家のご

住職というお立場を、改めて認識させられました。

一五世紀の古銭が一番多い関東で、一二世紀以前だけまとまって出土するのは珍しい部類ですし、戦国時代真つ只中の延徳年号が刻まれた板碑からは人々の来世への願いが窺われ、百観音に至っては「松戸にこんな人が！」……。

その日のうちに、同僚や他の博物館学芸員に宝物展を宣伝したことはいうまでもありません。感謝申し上げます（改めて調査させていただきます）。

◇ ◇

平成二九年九月二三―十一月一二日、松戸市立博物館では「本土寺過去帳と戦国社会展」を開催します。是非、お出掛け下さい。



百観音像
大悲殿で拝観することができます

記念講演会

塩澤、田上両先生が熱演

講演会委員 杉浦 上太郎

平成二七年一月に小畑代表幹事様から、「四五周年記念行事」の実行委員一四名が任命されました。

我が『記念講演会』は、添田昌弘さん、小畑二郎さんと私の三名が担当委員となりましたが、後に清水秀男さんに加わっていただき、パワーアップを図りました。

懐かしくも、平成二三年の「四〇周年記念行事」の際も、私は『記念講演会』及び『眼蔵会』を担当させていただきました(『眼蔵会』は小畑代表幹事様と共に)。

＝準備の流れは左記のとおりです＝

(一) 開催月日の決定

・平成二八年一月六日

(二) 講師の決定

①塩澤寛樹先生、②田上太秀先生

(三) リーフレットのデザイン・印刷

・岡本匡房氏の協力で低廉価格作成

(四) ダイレクトメールの準備

・会員・一般別名簿作成・郵送

(五) リーフレットの掲示

・大学・近隣センター等
集客促進

・「寺宝展」会場でPR

・会員への協力依頼

(七) 会場設営

・会員一三名に協力いただく

(八) 「講師を囲んでの懇親会」

・二一名出席(塩澤先生ご出席)

随所に椎名老師のご指導や小畑代表幹事様のご指示により、やっと準備を整え、当日を迎えることができました。

来客は順調で、会場の大悲殿は、開始前にはほぼ満席となりました。出席者は一一八名でした。

司会是小畑二郎委員。スタートは小畑代表幹事様の挨拶からです。

＝以下講師の講演概要です＝

〔講演Ⅰ〕『仏を造ること、仏をなおすこと』

塩澤寛樹先生

一一八〇年、平の秀衡によって灰燼と帰した南都消失から、東大寺復興までに関わった宮中、為政者たちの動向・意義について、解説されました。

〔講演Ⅱ〕『成る仏さまと拝む仏さま』

田上太秀先生



田上先生



福澤先生

冒頭、「仏教」の読み方は「仏(さとった人)の教え」とするのが適当である。と語られ、偶像崇拜的ではない人間釈尊の視点で、仏教の基本につきご指導くださいました。

閉会の挨拶は椎名老師。参禅会四五周年足跡を熱く語られました。最後に両講師及び参加者に謝辞を述べられました。

「在家得度式」、「東北旅行」、「寺宝展」に続いて「講演会」と四五周年の主要記念行事のすべてが終わりました。願わくは、本行事開催の意義が全会員の皆さまでに及びますように。

四五周年行事に参加して

弁当の手配に心砕く

柏市 坂牧 郁子

参禅会に伺うようになって、満五年が過ぎたのに、勉強不足で一向に禅の言葉がわからずにいる。こんな私が寺宝展のメンバーになり、務まるのか心許ない限りだった。

役割分担が決まり、リーダーをはじめとして、各担当の方は、打つと響く鐘のように素早い反応がある。

展示の説明文をどのような形で展示するか牧野さんと案を練り、A四サイズでダンボールを利用することとなった。

ダンボールを集めては切り溜め、日々、小さい仕事の積み重ねとなった。また、寺宝展に詰めていただく方への昼食の手配を担当したが、当日になっての人数変更や寒い日もあったうえ、連日詰めてくださっている方への思いもあり、予算の中で弁当の内容に心をくだいた。

マスコミの報道もあって、多勢のご来場者をお迎えできた。一人一人の力が結集し、寺宝展は終えることができた。



寺宝展準備中の一コマ

節目に出会えて

松戸市 河本 健治

今回の記念行事の一連より、大いなる時の節目を実感しました。

寺宝展にて、実行委員の一員として得難い体験と学びがあり、郷土の歴史文化財に触れ、貴重な作品に、多くの驚きと賞賛を聞けたことが熱く胸に残っております。

自の参禅においても、この度の得度式に、戒を授かり安名を頂き、これからの自分自身の生きる姿勢が、泰然と深く示されてあったことに強く感銘、感謝しています。

時々、山林に入り竹を見てみると、竹の節ぶしに、生命のエネルギーを感じます。この機縁を大事にしたいと思っています。

合掌

ザ・チーム寺宝展

白井市 佐藤 修平

年番幹事として四五周年記念行事を舞台の袖から垣間見ました。各行事は担当委員リーダーの多大なる尽力で大円成となりました。その中で「寺宝展」は半年を超える準備期間、展示物の選定・説明文、ビラ・ポスターによる広報活動、会場設営そして八日間に及ぶ展示期間など大変な苦労であったと思います。

特筆すべきは、七人の寺宝展グループの見事にハーモナイズされたチームワークです。細かい部分もおろそかにせず、各人がそれぞれの個性・技量を十分に発揮、そしてハーモナイズ。「いい仕事」を見させてもらいました。ありがとうございました。

旅行に悪戦苦闘

我孫子市 刑部 一郎

年番幹事の立場から四五周年記念行事支援のため、全体の予算管理を担当いたしました。記念行事予算は坐禅堂建設の剰余金六〇万円と毎年の剰余金を加算して七〇万円の規模とすることに決定いたしました。

そして、参加費を徴収する在家得度式と旅行を除いて、記念講演会に三〇万円、寺宝展に一五万円、記念出版に二五万円と振り分けました。記念行事の各リーダーのご努力により、ほぼ予算を守っていただきました。

ただ、旅行に関しては悪戦苦闘でした。参加募集人数が予定二五名に対し、最終的に一六名でした。参禅会で参加を呼びかけましたが、予定に達しませんでした。参加人数が減っても固定費は変わらないため、松井リーダー、五十嵐委員、小畑代表、刑部の四名で対策会議を何回か開催し、予算的に大変苦労しましたが、椎名老師、小畑代表のご支援で何とか乗り切りました。

まだ記念出版は残しておりますが、なんとか皆様のご協力のお陰で、全体実算は当初予算通りに仕上げることが出来ました。この場をお借りして皆様に厚く御礼申し上げます。

東北の旅

柏市 原 司

【東北新幹線の車中】

私の隣席は添田さんだった。毎月の参禅会の座談で話しえない歓談が始まる。

「私は仙台の出身です。東京の学校へ通うようになり、通い慣れたコースです：」と。

【観光バスの中】

「東北の旅」の案内（旅行委員作成）に書かれているように、バスは北上川を渡り、山地に入っていくねくねした山道を走る。五十嵐さんから指示があり「東北の旅」のしおりを用いて訪問事前学習が始まる。

旅行スケジュールにしたがい、要所々々で五十嵐さん、松井さんが車中マイクで説明する。代表幹事の小畑さんも学習の援助をすることがある。

【寺院拝観】

正法寺は一三四八年、天台宗の古刹として寺の奥の院に曹洞宗の道場を建てた。東北地方初の曹洞宗寺院である。

「東北の旅」のしおりに説明されているように、こんな山中に巨大な茅葺の本堂が建立されたことに私たちは唖然とした。当時のこの地の人々の禅の理解の厚さに敬意をもった。

広大な敷地の入口正面にある山門は重要文化財である。巨大な石段は当時のままで、一般参拝者は迂回路を通って庫裏へ行く。僧堂で坐禅を一炷行い、般若心経を誦読してから

盛田老師の法話を拝聴した。

正法寺は約六百七十年前に創設以来、道元禅師の禅風を守りながら、寺院と檀那との結びつきを大切にし、多くの人を育み輩出し、東北地方の宗教文化の発展に寄与している。

観林寺は一関にある曹洞宗の寺院。一六九四年に正法寺との本末関係を結んでいる。高橋老師の話を聞く。老師は「東日本大震災に関する復興支援活動記録」を資料として、千年に一度といわれた大震災の復興の努力を語られた。

平成二三年三月一日二時四六分、マグニチュード九・〇の地震発生から平成二八年一月九日まで活動のすべてを細かく列挙され、私たちの復興支援のあり方を将来への希望を胸にして、意欲的に話された。

【法話の時間】

湯の杜ホテル志戸平に到着。一〇月一九日（第二日目）午後六時一〇分。すぐ支度をしてお寺の法話の開始。

御老師は『延宝伝燈録 第七』を事前に調査され、正法寺の月泉良印禅師の出生、業績、また、「曹洞宗の法系譜」まで付記され、資料によりお話されました。私たちは正法寺の理解を一層深めることができました。

【ホテルの宴会】

まさに親睦の花が咲く場である。

旅行幹事と会計担当の刑部さんの配慮よろしく、飲み物は満足するほど振る舞われた。

私の隣席は小畑信雄さん（代表幹事の御子息）。まず、自己紹介から始まった。それから「父は家庭でよく仏典の読誦をしています。子供のとき、父の脇にすわられ、指導されました」と。

旅行幹事が私の前に来て「原さん、お元気でですね」と、杯を満たして頂く。

御老師が「先輩、原さん、どうぞ一杯」と、私の健康を祝し、激励して下さった。まさに恐悦至極。

私の余生に新たな充実感が湧きました。小山さんが得意の詩吟を発表して、指導し、宴会を盛り上げてくれました。

【被災地の現状の報告】

午前八時ホテル出発。語り部バスに乗車し、南三陸町中を走る。直接に津波を体験された主婦千葉さんは次のように力説された。

「どんな災難であろうと、まず、自分自身が生きること。生きてこそ人命救助も支援もできます。絶対に自分が生きていることです」とも述べられた。

普門寺の拝観を終えて、陸前高田市の震災跡を見学しながら、慰霊所のある広場へ。

平素、テレビで映像を通して復興の様子を見ていた。私の予想に反し、いかに巨大な津波であったか、驚嘆した。

この旅を通して受けた御親切を思い起こすといつも、共に念じている「自未得度先度他」の心をひしひし感じます。

寺宝展を拝観して

多数のお宝に驚き

我孫子市 美崎 大作

柏市の天徳山龍泉院の「寺宝展」を観た。秘仏とされる室町期作の旧本尊の釈迦如来像や庫裡のご本尊多宝如来を拝観。これらの「お宝」が展示されたのは今回が初めてというのも驚きである。

「車で行くような不便な場所にこんな立派なお寺があるのか」と正直思ったが、お寺の地域の住民との信仰を主とした日常の密接な結びつきを証明している。

今後歴史的、文化的に価値のある「お宝」を見学する機会を作って頂きたい。

書や古版本に感動

我孫子市 渋谷 ゆり子

相馬師胤氏が開山の元という、由緒ある龍泉院で初めて寺宝展を拝見し、書や古版本の珍しい品がたくさんあり、感動致しました。

特に泉地区ゆかりの弁栄上人自筆の仏画や、上人自身が描いた「東葛印旛大師」の准四国八十八ヶ所順路の絵地図を見た時は、とても驚きました。

龍泉院にこれだけの宝があることは、御住職や古くからの檀家様の信仰の厚さを感じました。また、この企画を立案された御住職や参禅会の方々に感謝致します。



記念講演会後の懇親会

第三四回成道会

大和宗龍禪師を称える

平成二八年一月八日、恒例の第三四回成道会が開催されました。差定は昨年と同じように坐禅堂で二炷の坐禅を組んだ後、本堂に移って成道会の法要が行われました。

梅花講員八人の方の詠讃の中、御老師が入堂、拈香香語の後、普同三拝を行い、「般若心経」を一卷諷誦、その後、御老師の法話がありました。

法話は江戸時代の清僧大和宗龍禪師について、概要次のようなものでした。

大和宗龍禪師は一七一七年（享保二年）群馬県の富岡の農家で生まれ、新潟県の萬福寺で悦巖禪師の下で修行、禪師が石川県天徳院に移られるとともに、それについて修行。悦巖禪師が新潟県新発田の観音寺で示寂されると、四六歳でその第三世住職になられました。その後、岐阜県高山で住職をなさいましたが、寺にはほとんどおらず、乞食をしながら、全国で信仰を伝えられました。

名僧知識ではなく、単独の伝記なども残されていません。しかし、コツコツ働き、地道に道を説かれ、曹洞宗の核心を保たれた方でした。

大和宗龍禪師は生涯、高德の僧が務める助化師（＝修行僧を教える僧）を三三回務め、授戒会を六四回行いました。千葉、埼玉、東京などでも行い、船橋市夏見の長福寺で第五七回の授戒会を行った時には当山の一九世の住職が檀徒四人の方と参加しています。良寛さんとも親交がありました。七三歳で示寂されました。

その後、御老師との間に恒例の問答に移り、下記のようなやり取りがありました。

問…煩惱の火が消えない。いかにすべきか。

答…煩惱は死ぬまで起こります。それをコントロールすることが大切です。

問…『正法眼蔵、坐禅箴』に「徹底の行程は挙体の不行鳥道なり」という言葉があります。不行鳥道についてお示しください。

答…どんなことにも動じることなく、おのれをただ、大自然に任せることです。

問…いかなるか非思量。

答…非思量とは私もなかなか至らない心境です。あれこれモノに動じず、仏様の教えにそ

うことです。

問…一生かかっても悟りはえられそうにありません。坐禅で自分が進歩しているかを図る尺度はあるのでしょうか。

答…初めて来られた時より、穏健で静かになれました。これが坐禅の功德です。

問…柏樹を植えたのですが、当山に種はあるのでしょうか。

答…ありません。どこかで見つけ大きく育てて下さい。

問…「岩もあり木の根もあれどさらさらとただ　さらさらと　水は流れる」

答…素晴らしい心境。そのように努めてください。

問…百年後は。

答…なるようにしかならない。現在の心がまををもって生ければ悪くはならないでしょう。

問…慧能禪師は「道を悟るのは心」といい、道元禪師は「身」といわれる。身か心か。

答…一言半句に拘泥（こうでい）する必要はない。心にかなうならどちらも真実です。

その後、大悲殿に移り、典座さんがつくられた料理に舌づつみを打ち、各人の感想など話して楽しい時を過ごし、午後三時過ぎに散会しました。

托鉢行

豪快な喜捨

八千代市 山本 聡

昨年二月一八日に龍泉院「歳末助け合い托鉢」が冬の穏やかな日差しのもと、柏駅東口で行われました。

昨年同様長全寺さんに駐車場と門前を集合場所にお借りしました。参加者全員集合したところで法堂前に並び、御老師が導師をお勤めになり『般若心経』一卷を誦してから、柏駅前に移動しました。

御老師と参加者一二名で募金箱をもって駅前を行き交う人々に喜捨を呼びかけ老若男女さまざまな方々からご喜捨をいただきました。

女性の優しい手は穏やかに、幼い子供は両親に促されてかわいい手で募金箱に喜捨を入れてくれました。なんと強面の三人も喜捨してくれました。そのうちの一人は豪快に小銭入れの中身を全て投じ、御老師と呵々と笑っていました。

今回の托鉢行でいただいたご喜捨も、前回と同じく会の代表者を通して全額を朝日新聞厚生文化事業団に寄付したとのことです。

托鉢問答

白井市 小山 齋

昨年と同様、小春日和の好天に恵まれ、龍泉院参禅会東葛クラブの歳末助け合い共同募金活動が二月一八日に柏駅前行われた。今年も昨年同様、小生の鍛錬の場として、二時間が設定されたと覚悟を決めていた。しかし、昨年と異なり気温は高く、手がかじか



托鉢行に励まれる御老師と同行の会員

むこともなく、気持ちよく立つことが出来た。柏は千葉県東葛地区の中核都市で人通りも多く、賑やかな駅前であり、募金も多く期待出来そうである。

募金活動の始まりに、東葛クラブの有志の多額の喜捨が呼び水となり、多くの人の協力があった。中でも子供たちの寄付には頭が下がる。子供たちにとって、このことは今後の人生に大きな力になると念じたい。

一日のうちに朝が二度こないと同じように、この募金活動の二時間は貴重である。坐禅では無になることに努力するが、この雑踏では無にならない。行き交う人々に声を掛け、我々の募金活動を知っていただき、喜捨を念じつづける。声を出して呼びかけ協力をお願いするのか、静かに立って協力を念ずるのか、声を出したり念じたりのリターンである。

一人の女性が前に立った。募金をしてください。頭を下げると、こう問いかけてきた。

「何で募金活動をしているのですか？」
「何ともストレートな質問である。」

「考えたことがない、ただ歳末の一行事として身につけた活動で、毎年の恒例」と答えた。



幟を掲げる小山さん

「坐禅会の活動のようですが、坐禅をして何か得るものがありましたか。何か変わりましたか」。

「変化を期待して坐禅に入りましたが、老師に為坐禅はいけないと教えられました。何も考えずにただ坐るだけでいい。至極簡単でした。しかし、自分の中で何かが変化しました。大きく変わったと確信しています。貴女も坐ってみませんか」とクラブのチラシを渡した。果たして反応や如何。

募金は昨年より少し少ないようですが多くの人のご協力がいただけました。

新たな出会いに驚き

我孫子市 小畑 二郎

二月一八日(日)の歳末助け合いの托鉢に参加することができ、大変幸せに感じています。

参加するたびに、思いもかけぬ人との新たな

な出会いがあることに、驚かされます。

今年もひとつ面白いことがありました。托鉢も終盤に入り、立ちっぱなしで足が突っ張りかけてきたころ、御老師は、平然と鈴の音さわやかに、読経しておいででした。その時、年は二〇歳前後の三人組の男の子たちが、御老師を取り囲むように迫ってきたので、隣にいた私は、御老師の身に間違いがあつてはいけないので、念のため「お礼のパンフレット」を渡すふりをして、御老師のそばに近づきました。

すると、何と、そのうちの一人が自分の持っていた小銭入れの中のコインを全部、御老師の募金箱に空けるではないですか。「ご利益があるように」とか言いながら。後の二人もそれぞれ小銭を御老師の箱に入れたようでした。

御老師は、やさしく「どうもありがとう。良いお正月が来るよ。」と呼びかけていました。なんともさわやかな出会いでした。参禅会への誘いを手渡しておいたので、ひよっといしたら、龍泉院にも来るかもしれません。このような若い人たちとの出会いがあるので、歳末の托鉢は楽しみです。

終わった後の温かいうどん一杯だけでなく。

新年会

一九名が和気あいあい

二月一二日、うどん市で龍泉院恒例の新年会が開催された。参加者は一九名、和気あいあいの三時間を過ごした。各人の今年の抱負で、普段あまり聞かれない真情を吐露した発言があつたので紹介しよう。

御老師 参禅会の記念行事は五年ごとに行っているが、今回が一番盛大だったのではないか。私は二三歳の時住職になり今秋、六〇年を迎える。今年は西年で羽ばたく年。これまでの事を振り返るのではなくこれから国際交流を図り、外国人の坐禅に力を入れたい。一風変わったことに取り組みたい。

小畑(節朗) 今年御老師のいわれるように羽ばたく年にしたい。柏のプラザを利用、国際協力を進めたい。人は家、仕事に居場所がなくなり、坐禅は第三の居場所と考えていた。だが、そうではなく「本来の居場所」と思い、それを提供できるようにがんばりたい。

杉浦 いま地域活動に二四時間没頭している。今後は民生委員を天職としてやっていきたい。坐禅のポテンシャルは落ちたが、地



域活動は坐禅に合致していると思っている。また、新しい年に向かってチャレンジしたい。年齢ではなく精神性が大事。五〇周年を目指してがんばりたい。

五十嵐 国際交流を進め、英語で坐禅指導をできるようにしたい。

刑部 旅行は苦戦したが、御老師、小畑代表幹事の援助で無事円成できた。今年は身辺整理の年にしたいが、参禅会五〇周年に向けて気合いを入れてやりたい。

佐藤 子年生まれで、旧暦だと今年で七〇歳になる。シヨックだが、なんとか乗り越えたい。昨年、四国遍路を計画したが、果たせず、秩父三四カ所の巡礼をし、大変気持ち良かった。今年もまた、巡礼したい。

山川 昨年も新年会に参加させていただき、今年で二回目になった。坐禅については分からないが、参加することで、普段の坐禅とは違う情報を得られた。私の名前は英語だとマウンテン・リバー・ゴーになる。今年もゴーで行きたい。

清水 今年で七四歳になる。ここ四、五年

は闘病生活を送っているが、人生は一期一会。今しかない。皆さんに会うことはこれが最後かもしれないと、そう思い、いまを充実させて生きたい。また、アンダーグラウンドという英語がある。日本語では理解と訳しているが、「下に立つ」と訳せる。人と心を通わせるために下に立つことが必要で、初めて理解できる。

河本 年末、体調を崩したが、いまはなんでもなくホツとしている。昨年行われた寺宝展で「坐禅をしたい」という方が三、四人いた。中には寺宝展に二回来られた方や女性もいた。このような方の気持ちはよく分かる。自由参禅に参加させるようにしたい。

岡本 NHKの「心の時間」を見たら「坐禅の時、呼吸は自然にするのがよい」と言われた。これまで腹式呼吸にこだわっていたが、それをやめたら坐禅の時間が短く感じられた。こだわらないのが大切だと思った。世の中は不条理だが、だからこそ、坐禅が必要だと思う。



逢坂 週三回カラオケに通っている。何をしたいかは年齢で

はない。人生は目標を持つことが必要だ。

山本 セネガルから訪日した人に会ったら、坐禅体験があった。外国人は坐禅に興味を持つ方も多いので誘いたい。

小畑（二郎） 御老師の話を伺い、やる気を出した。坐禅の英訳を行うなど、今年は新しいスタートを切りたい。

鈴木 今年も楽しく生きていきたい。

小林 本日は誕生日。皆様の法話を聞けて、来てよかった。

小山 一人で坐つたこともあったが、やはり群れ（サンガ）がよい。広げるために例会以外にも来て欲しい。

相澤 鎌ヶ谷を走った。寒かったが帰ってフロに入ったら気持ちよかった。いま「心技体」というが昔は「心気体」と言った。気はやる気だと思う。

松井 継続は力なり。長い間行ってきたことを年番幹事につなげたい。檀家や近所のかたにも来ていただき「素晴らしい寺」と言われるようにしたい。

山桐 昨年の四五周年記念事業は大変だったが、今年は外国人に来ていただきたい。年番幹事として精一杯がんばりたい。

参禅二十年

流山市 久光 守之

「仏の家の中へ、身も心も投げ入れて、全ての事が、仏の家の側より力も入れずして行われるとき、汝は身心脱落、脱落身心せり」と、今朝も端座させて頂き、有難く感謝する。

成道会に於いて、参禅二十年を記念して御老師様より、額装された「摩尼珠」と、身に余る見事な直筆の讃を頂きました。

想起せば、三五年前より「般若心経」と「観音経」の写経を始め、「四国八ヵ所」の歩き遍路を二回参拝して一五年を過ぎたが、なかなか坐禅には仏縁なく、二〇年前、亡き安本小太郎様とお会い出来て参禅させて頂きました。

その後、二〇年の間、入院六回の手術後の一日は坐禅すること出来ませんでした。以外の日には毎日一炷ですが、仏の家の側の勧めにより、端坐させて頂いております。

参禅の初め、御老師様に導かれ、また釈迦牟尼仏様の優曇華が尽十方界に咲き、その功德により「正法眼蔵九五卷」を浄写させて頂き、今日二回目の浄写七二巻目の「三七品菩提分法」迄を書き終えさせて頂きました。こ

の巻の最後に「坐断すべし、脱落すべし」と高祖道元様が励まして下さっております。

御陰様で二〇年の間、二回（通算五回）の「四国八ヵ所」歩き遍路を行い、その間も日日、坐禅、写経、正法眼蔵浄写を続けさせて頂きました。

「魚行遅遅、鳥飛杳杳」法性水にあらん限り、この飛行は止められない。有情非情同時成道、草木国土悉皆成仏なるが故に。ただ、端坐して、深く限らない深般若を開演する所存であります。

そうです。生死の中に弁道するのではなく、弁道の中に生死を見ると強く思います。「而今の晩学たゆむことなかれ」と高祖様も励まされていますように、人生に定年無し、老後も余生もなし、死を迎える一瞬まで人生の現役です。

人生の現役とは、一日一日を悔いなく生きること、死後も同様と思います。

これからも身心脱落、脱落身心、と仏に身も心もお任せして、脱落せる正定道支を、毎日行う所存ですので、どうか御老師様、皆様様の御指導、御援助を御願い申し上げます。

『恵方とは ただこの道を すすむだけ』（虚子の句）



「摩尼珠」の額と久光さん

普及委員会から

平成二八年一月から一二月の間に坐禅体験会が六回開催されました。一月一日（日）には柏市のテニス同好会イカスミの方が一〇名、八月七日（日）は我孫子市の裏千家流の小林茶道教室の方が五名、八月二三日（火）は柏市の東葛柏福祉会の方が一九名、九月一五日（木）は海上自衛隊でカウンセリングを担当されている方が二七名、一二月一日

(木)の午前中は海上自衛隊下総航空基地移動通信隊の方が二七名、同じく午後には二六名の方が参加されました。従って、昨年は一〇四名の方が坐禅体験会に参加されたことになりました。

八月七日の我孫子市の茶道教室では、師匠の小林さんが「茶道や華道は禅と文化的・精神的に結びつきが強い。前から一度鎌倉の禅寺で坐禅を体験したいと思っていたが、龍泉院のHPを見て、坐禅体験会があることを知り、お願いした次第です」と、参加の動機を語っていらつしやいました。

参加者も「坐禅は茶道のお手前に似ており、通じる所があると感じた」、「茶堂は絶えず動くが、坐禅は動かない。しかしその精神は似ている」など、禅と茶道は文化的・精神的に近いことを感じられたようです。

八月二三日の東葛柏福祉会では坐禅体験が終了した後、御老師から「龍泉院の坐禅堂は参禅会員の『自未得度先度他』の心で造られたものなので、皆様方が坐られることをとおおいに歓迎します」と話されました。

東葛柏福祉会の勝又烈会長からは「一度坐禅を体験してみたかったので、添田さんをお願いして龍泉院さんで体験させていただくこ

とができました。今回の坐禅体験会をお世話下さった御老師初め参禅会の方々に感謝申し上げます」との御礼のお言葉がありました。

九月一五日の海上自衛隊の体験会は、カウンセリングを担当されている方が来山されました。参加者がカウンセラーであることから、法話の中で、御老師は、「皆さんは自衛隊でカウンセラーという非常に重要な仕事をしておられる。カウンセラーで大事なことは人間の心をどう受け止め、扱うかである。

仏教では唯識学という学問がある。最も頼りになるのは自分である。ところが最大の敵も自分である。手がつけられない自我の塊の心をどう扱うかが唯識にでてくる。

坐禅では頭を空っぽにする。自分の物差しを捨てる、やめる。大自然の息吹と一体になることを重んじている。自分に誠実に生きる姿勢が大切。真心が通えば何でも解決する」と述べられました。

参加者からは「自分の物差しを取り除くという話に感銘を受けました」、「自分は周りからの支えがあつてこそ生きることができるという気持を再認識できて、清らかな気持ちになった」、「まず自分自身を良く知ることが支援する上で大切だということなど、今後の活

動に役立つ内容でした」などの感想が寄せられました。

二月一日の午前と午後に行われた海上自衛隊下総航空基地移動通信隊の坐禅体験会は、参禅会員の豊福さんのご紹介によるものです。午前中はほとんどが若い隊員でしたが、午後は年配の幹部クラスの方も参加されました。

参加者は日頃から厳しい訓練を積まれているせいか、初心者ながら背筋がピシッと伸び、坐相がしっかりしているのには感心しました。しかも茶話会時には「坐る時間は短く感じた」と感想を述べられていました。恐るべしです。

なお、今年の坐禅体験会に参加された全員に永井政之監修『ふつと心がかかるくなる禅の言葉』(ナガオカ文庫)が贈呈されました。これは小畑代表幹事さんが用意されたものです。感謝・感謝。

今年も引き続き坐禅体験会を開催いたします。坐禅堂だけでなく外部での出張坐禅体験会も考えています。

龍泉院参禅会のHPなどで呼びかけますが、皆様の周りの方々にも呼び掛けて下さるようお願いいたします。

想う事

「一期一会とおもてなしの心」

我孫子市 清水 秀男

一期一会の言葉は、茶湯に深く傾倒した幕末の大老 井伊直弼の茶会における主客の心得を著した『茶湯一会集』の冒頭に出てきます。一期一会は、直弼の茶道哲学の根幹をなす考え方です。『茶湯一会集』の直弼の言葉を拙訳すると次の様になります。

「茶湯の交わりは一期一会といって、たとえ同じ人と幾度会う事があっても、今日の出会いは再び巡ってこない、一生涯一度限りの出会いである。

主人は全ての事に気を配り真心を尽くし、客も二度とこない大切な出会いである事を心に留め、亭主のあらゆることに心が行き届いていることを深く感じ、双方が誠意をもって交わるべきである。これを一期一会という」。

そして、直弼は更に茶会が終わった時の大切な心得として「独坐観念」という茶道観を展開しています。その要点を拙訳します。

「主客共々余情残心の思いで別れの挨拶をし、客は露地を出る時大声で話す事なく静

かに帰路につく。亭主は客が見えなくなるまで見送り、心静かに茶席に戻り、炉の前に独坐する。そして客を思い、今日の出会いは二度と帰らない貴重な一期一会であったと思ひめぐらしながら一人で茶を点てて味わう。これが一会の極意である」。

即ち、今日の茶会での主客の出会いとは再び巡ってこない貴重な人生の出会いである。主人はあらゆる事に心配りをし、客も主人の意向を心に留め尊重し、双方が誠をもって交わる事が大切である。

そして、茶事が終わったら主客双方が今日の出会いの余韻を味わいながら別れの挨拶をし、主人は客を名残を惜しみながら見送った後、茶席の炉の前に独坐し、客人と再び帰らざる一期一会の出会いであったことを深く思ひめぐらし、嘯みしめながら独服する。

そして、一期一会は、そこまで到達してはじめて極意に達するのだと、直弼は言いたかったのだと思います。

一期一会の思想には仏教の無常観が根底にあります。無常とはすべてのものは変化し一瞬たりとも留まらない事と学びました。今という瞬間は二度と繰り返される事はない。今は今しかない。

今この一瞬を大切にして命を完全燃焼させて生きる事が、人生を生き生きと充実させる事になり、未来を正しく生きる道に通じると思っています。この無常観を見据えた生きざまがまさに一期一会の基本思想だと思います。

そして、仏教の戒律の第一番目には不殺生戒があります。殺生の対象は普通命あるものを指しますが、私はそれに時も入れなければならぬと思います。

無為な時を過ごす事は殺生をしている事と同じ。一期一会に生きるという事は時を殺生しない事であり、「時は命なり」と身をもつて感得する事であると。

また、一期一会は「おもてなし」の心に通じると思っています。人との出会いを大切にし、今出会っている時間は二度と巡ってこない一度きりのもの、この一瞬を大切に最大の誠意をもって今出来る最高の接遇をする。

そして、別れた後も貴重な一期一会であった事を味わい反省しながら更に高みを目指し努力していく。まさにこれが「おもてなし」の心ではないでしょうか。

残り少ない人生、今の一瞬一瞬を「一期一会」の心構えをもって生きていくべく精進していきたい。

新年に当たりあらためて深く心に刻んでいます。

「無常なる旅にしあれば 一期一会の歩みを いとしみゆかん」(拙句)

自分本位も甚だしく

船橋市 高間 治基

坐らせて頂いて半年、腹が坐った。今年は全てを改める年と決めた。

春先には母方実家筋の墓所を返納した。五月に安名を頂戴した。そして、六月に家業に終止符を打った。夫婦別居を余儀なくしていた元凶が劇的な展開をみせ、困り事恨みっこなしの清算である。

今、丁度参禅会にご縁を頂いて一年となるが、参禅会発足四五年の節目と重なる。記念講演を拝聴した。なる仏・・・貪らず 怒らず 成るがまま。現在の小生の偽りざる心境に限りなく近い境地である。

なんとならば、四代続いた元祖家具屋の看板を降ろすに当たっては相当な苦悩を伴った事は事実ではあるが、今やそれで良いのだというのんびりした環境に身を置いて、時代の

行く末を看着いる自分がいる。

時代の流れは、家具をして一子相伝の工芸品と、低価格優先の粗悪品とに二分化した。耐久性消費財製作という誇りが中間的立場で、他品種少量生産で対応してきたが、経営の舵取りが難しくなった今、ここで派手な投資をして海外製品に対抗するか、撤退する勇気を発揮する時期を見定めつつ腹が決まらず、中っ腹の状況にあり、酒で抑えていた時期が数年続いた。

社員に給料を払うべくサラ金のご厄介にもなった。全てを経営にさらけ出し根補償はじめめありとあらゆる手立てをこうじたが、これが幸いした。

参禅会にご縁を頂き、安名を頂いてから六月二七日に破産申請し、即時受理され管財人が決まり来訪されて、類を見ない進捗状況で結審に向かっている。

これはご先祖の余徳と仏縁以外の何者でもない。老師から安名を受け、「よく保つや否や」に対し「よく保つ」と返事をした以上、酒もご法度になり、労苦の元凶となる会社に没頭したとはいえ、実際の矢面に立ったのは長男であり、類希な勉強をしている。

小生は生まれたままのスッポンボンになれ

ば良いのだとたかをくくって、成るよう、行くよう坐り続けている。

損をさせた業者はなし、社員はことごとく活路を決め金融機関は損害保険で補填すればよい。小生と家族がどうにかなればすべて円く治まる。将に干支に因んだ禅の境地。

仏縁に感謝してあまりあることは長年居座っていた長女が片付く事となった。相方の出は越前総本山のお膝元とある。

新年会で拝領した申が上下で手を繋ぎ円を撞くっている相が申年を送ってくれそうである。時期を見て応分のお布施を包みたいものだ。

今月がお世話になりっぱなしで参禅一年を迎える。悉く有り難く。

九拝

寺田 哲朗氏のご逝去

去る二月二一日、千葉市在住の寺田哲朗氏が満八一歳でご逝去されました。

氏は昨年まで四〇年間、当参禅会のために多大の貢献をされました。謹んでご冥福をお祈りします。

沼南雜記

【定例参禅会・年間行事】

(一) 内は座談の司会者

平成二八年

- 九月二五日 三二名
(山川 進氏)
- 一〇月二三日 三一名
(加藤 孝氏)
- 一一月二七日 二九名

龍泉院参禅会簡介

【参禅】

一、定例参禅会

・日時 毎月第四日曜九時(初参加者は八時半) 来山、正午解散
・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順

(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

・講義 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱
・座談 自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅

・日時 毎月第一日曜と第二土曜九時から正午まで
・坐禅 九時から一時まで(入退堂自由)

・作務 一時から正午まで坐禅堂掃除
※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一夜接心 本年は六月七、八日、一泊し七炷の坐禅と提唱等

一、成道会 本年は二月七日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

一、他の行事 涅槃会(二月一五日)、花祭り(四月八日)、施食会(八月一六日) 手伝い、歳末煤払い(十二月例会後)、

歳末助け合の托鉢(二月第三日曜日)

毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

一、『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)

一、『口宣』(年一回)

【ウェブ사이트 <http://www.ryusenin.org/>】『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます

● 二月四日 (山桐 照夫氏) 名

成道会

幹事 小畑 節朗氏

刑部 一郎氏

佐藤 修平氏

小林 裕次氏

● 二月一八日 一二名

● 二月二五日 三三名

● 二月二五日 (相澤 善彦氏)

● 二月二二日 二九名

● 二月二二日 (鈴木 民雄氏)

● 二月二二日 一九名

● 二月一五日 九名

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

● 二月二六日 (小林 裕次氏)

● 二月二六日 三七名

一二月二二日(六名)、一四日(一名)

一八日(六名)

一二月二二日(七名)、一〇日(八名)

一六日(七名)

一月六日(五名)、一四日(九名)

二〇日(五名)、三〇日(二名)

二月三日(五名)、一一日(六名)

一七日(五名)

【坐禅普及委員会】

八月二三日(二二名)

九月二七日(九名)

一〇月二五日(八名)

一月二二日(七名)

● 寺宝展が終わったら、早くも明珠の編集。時を無駄に過ごさたくないというお釈迦様のお導きか。とかく怠惰に流れがちの自己への戒めととらえ、今年も頑張ります。

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)

● 寺宝展の展示品を拝観していると、その土地に棲む神々や人々の連綿とした営みを感じました。古から伝わる「文化」と新しい「文化」を「中庸」に使いこなせば真に豊かな暮らしが実現するのは。そんな気がしました。(智聰)